

# 赤ずきん絵本の比較：ワッツ、ガルドン、ツヴェルガー

## 須賀 千絵

### 1. 昔話と昔話絵本

昔話とは民衆の間に語り継がれてきた口承文芸のひとつであり、その多くが「むかしむかし」などの定型句で始まる単純素朴な物語である。黙読による読書の普及に伴い、大人は昔話から離れていったが、現代でも、幼い子どもたちの間で、昔話は健在である。図書館でも、昔話の語り（ストーリーテリング）や昔話絵本の読み聞かせなどを行っている。

昔話が子どもたちに好まれる理由として、昔話が、耳で聞いただけでわかるような単純なストーリーであることが挙げられる。また登場人物には個性がなく、おじいさん、お姫様、魔法使いなどの一面的な特性が設定されているにすぎない。複雑な心理描写もなく、具体的な行動でストーリーが進む。そして冒険の末、弱い者が幸せになるという結末につながる。リュティは、これらの昔話に共通する特徴をまとめ、次元性（現実世界が、動物と人間が語り合うといった異次元の世界につながるなど）、平面性（登場人物に肉体的・心理的奥行きがなく、傷を負っても苦痛は生じず、悩むことも少ないなど）、孤立性（エピソードひとつひとつが孤立していて繰り返しが多いなど）といった語を用いて説明した<sup>1</sup>。

昔話を絵本化する場合には、口承文芸としてはもともと存在していなかった視覚的表現が加わる。視覚化することで、現代の世界では失われた事物や風習をわかりやすく示すことができるという利点もあるが、具体的に目に見える形に置き換えることで、昔話の特徴が失われる事例も見受けられる<sup>2</sup>。

### 2. 赤ずきんの物語とその絵本化

#### 2. 1 赤ずきんの物語の起源

赤ずきんは、17世紀末にシャルル・ペローが出版した昔話集にはじめて収録され、その後、グリム兄弟による『グリム童話集』にも収録された。グリムに赤ずきんを語ったのは、フランス出身のユグノー派の裕福な家庭に育ったハッセンプフルーク姉妹である<sup>3</sup>。レレケが、姉妹の話は18世紀フランスの昔話と「しばしば明白に一致している」と述べているように<sup>4</sup>、赤ずきんに似た話も

フランスの昔話の中に見られる<sup>5</sup>。ペローの話は、赤ずきんが食べられるところで終わり、赤ずきんとおばあさんが救出されるグリムの話と結末が異なる。現在、日本で刊行されている赤ずきんの絵本の多くは、グリムの昔話によるものである。

## 2. 2 国内の赤ずきん絵本

赤ずきんは、グリムの昔話の中でも人気が高く、世界中で多くの児童書が出版されている<sup>6</sup>。日本でも相当数の翻訳書が出版されていると考えられる。翻訳書の総数は明らかではないが、2005年に国内で行われた展覧会図録には、明治期以降の翻訳書として300冊以上がリストアップされている<sup>7</sup>。また国内有数の児童書コレクションを持つ大阪府立中央図書館国際児童文学館の所蔵目録で、絵本に限定して検索すると、145点の検索結果が得られた（2019年11月2日に「書名 あかづきん」「分類 E（絵本）」「言語 日本」「対象 児童」の条件で検索）。

これだけ多くの絵本が刊行されているにも関わらず、国内の赤ずきん絵本の比較研究はあまり行われていない。まず高橋は、1985年に、国内の赤ずきん絵本12点の比較を行い、再話の過程で、赤ずきんのかわいらしさが強調され、性的魅力を隠し持っている部分が描かれていないこと、大きくて深いドイツの森が十分に表現されていないことなどを指摘した<sup>8</sup>。しかし高橋は、個別の評価を行うことを目的とせず、全体の特徴を見ることを主眼としていたため、個々の絵本間の特徴の違いについては十分な分析は行っていない。次に灰島らは、1970～80年代以降の絵本に着目して、無垢で無力な少女だった赤ずきんに代わる新たな赤ずきん像が出現していることを指摘している<sup>9・10</sup>。しかし紹介の範疇に留まり、十分な検討がなされているとは言いがたい。なお比較を伴わない個別の絵本を対象とする研究としては、藤本によるツヴェルガーの赤ずきん絵本の研究がある<sup>11</sup>。このほかに赤ずきん絵本に関する海外の研究も数多く存在すると思われるが、絵が共通でも、日本語の文章を伴う絵本は扱われていないと推測されるので、先行研究としての調査は行っていない。

## 2. 3 研究の目的と方法

本研究の目的は、国内の代表的な赤ずきん絵本3点を取り上げ、それらを比較することを通して、それぞれの特徴を実証的かつ相対的に捉えることである。対象の3点は、オーソドックスな内容のものの中から、定評があり、多くの公共図書館が所蔵しているワッツ、ガルドン、ツヴェルガーの作品（日本語訳）とする<sup>12・13・14</sup>。各作品の概要は次章で述べる。それぞれの絵本を手にとって、主人公の造形や個々の場面の表現、文章を互いに比較する。一部の文章については、対象とした作品以外の本での翻訳とも比較した。

## 3. 絵本の分析

### 3. 1 対象とした絵本の概要

対象とした3冊（図1～3）の概要は表1の通りである。都内公共図書館の所蔵状況は、東京都立図書館の統合横断システムを用いて調査した<sup>15</sup>。ワッツの赤ずきん絵本は、判型の違う大型絵本シリーズのものと岩波子どもの本シリーズがあり、両者は同じ絵を使っているが、絵の配置などの

レイアウトが異なる。本研究では、原書と同じレイアウトの大型絵本シリーズを用いた。

表1 対象の絵本の概要

画家	バーナディット・ワッツ	ポール・ガルドン	リスバート・ツヴェルガー
訳者	生野幸吉	ゆあさふみえ	池田香代子
出版社	岩波書店	ほるぷ出版	富山房
刊行年	1978年	1976年	1983年
大きさ(縦×横)	32×24cm	21×27cm	22×24cm
備考	大型絵本		
都内図書館の所蔵状況	所蔵自治体数	52	47
	所蔵率 (全52自治体中)	100%	87%
		87%	90%



図1 表紙(ワッツ)



図2 表紙(ガルドン)



図3 表紙(ツヴェルガー)

続いて3人の画家の経歴を簡単に述べる。

バーナディット・ワッツ (Watts, Bernadette) (1942年 - ) は、英国ノーサンプトン (Northampton) に生まれ、メイドストーン美術学校 (Maidstone Art School) に学び、絵本画家のブライアン・ワイルドスミス (Wildsmith, Brian) に師事した。1968年に出版した『Rotkäppchen (日本語版書名『赤ずきん』)』は、ボローニャ国際児童図書館展のグラフィック賞を受賞している。このほかに *Rapunzel* (『ラプンツェル』)、*Hansel and Gretel* (『ヘンゼルとグレーテル』) など、昔話を題材とする絵本を多く手がけている。

ポール・ガルドン (Galdone, Paul) (1914 - 1986年) は、ハンガリー・ブダペスト生まれで、10代で家族と共にアメリカに移住した。本のジャケットデザインの仕事についた後、1950年代から絵本画家となり、イブ・タイタス (Titus, Eve) の *Anatole* (1956年) (『ねずみのとうさんアナトール』) と同シリーズの *Anatole and the Cat* (1958年) で、アメリカ児童図書館協会がその年に出版された最も優れた絵本に授与するコルデコット賞を受賞した。昔話を題材とした絵本も多く、1974年に出

版した *Little Red Riding Hood* (『あかずきんちゃん』) のほかにも、*The Gingerbread Boy* (『しょうがパンぼうや』)、*The Three Bears* (『3びきのくま』) などの作品がある。

リスベート・ツヴェルガー (Zwenger, Lisbeth) (1954年-) は、オーストリア・ウィーンに生まれ、ウィーン応用美術アカデミー (Applied Arts Academy of Vienna) で学んだ後、1977年にE.T.A. ホフマン (E.T.A Hoffmann) の *Das Fremde Kind* (『ふしぎな子』) でデビューした。1990年に全作品と児童文学への貢献に対して、国際アンデルセン賞画家賞を受賞した。*Rotkäppchen* (『グリムあかずきん』) は1983年の作品である。

### 3. 2 主人公の造形

ワッツの赤ずきんは、年齢が5、6歳くらい、3冊の中では、最も幼く見える。顔にはあまり表情がない。赤ずきんは、肩にかかるケープのついたフードの形態である。次にガルドンの赤ずきんは、12～13歳くらいに見える。3冊の中で、最も表情豊かで、場面によってさまざまな表情を見せる。赤ずきんは膝丈のマントのついたフードで、色は、赤というより朱色である。足元は森の中を歩くにはあまりふさわしくないように思われるバレエシューズのような靴である。最後に、ツヴェルガーの赤ずきんは身長から9～10歳くらいのように思われるが、はっきりとした表情が示されないこともあって、落ち着きがあり、大人っぽく見える。赤ずきんはふちなしのキャップで、ケープはついていない。

### 3. 3 場面構成と絵の特徴

3冊の絵本の場面構成を表2に示した。ワッツは全15場面、ガルドンは全16場面、ツヴェルガーは全11場面から構成されている。

ワッツはクレヨンと絵具を使い、重みのある色づかいを特徴とする絵である。全体を俯瞰した構図が多く、空や森などの背景を大きく描いた中に、登場人物を配置している。ガルドンは水彩で明るく軽やかな色彩である。ワッツやツヴェルガーの作品に比べ、クローズアップが多用され、登場人物のポーズにも動きがある。ツヴェルガーも水彩である。余白を多くとり、背景をあまり描き込まずに、人物を際立たせている点に特徴がある。赤ずきんやオオカミにはっきりした表情はないものの、シーツが乱れている様子やオオカミの毛並みなどを見てわかるように、写実性が高い絵である。

表2 場面構成と絵に描かれている内容

	ワッツ		ガルトン		ツヴェルガー	
	場面	絵の内容	場面	絵の内容	場面	絵の内容
1. 赤ずきんの紹介とおつかいへの出発	1	正面を向いて立つ赤ずきん	1	正面を向いて立つ赤ずきん		
	2	手を振る母親と赤ずきん	2	赤ずきんにかごを渡す母親と赤ずきん (上半身)	1	赤ずきんのエプロンの紐を結び母親と赤ずきん
2. オオカミとの出会いと誘惑	3	向かい合って立つ赤ずきんとオオカミ	3	向かい合って立つ赤ずきんとオオカミ	2	歩いてくる赤ずきんを待ち受けるオオカミ
	4	正面を向いた赤ずきんと後ろ姿のオオカミ	4	オオカミとその背中を見る赤ずきん (上半身)	3	赤ずきんを誘惑するオオカミと赤ずきん
	5	並んで歩くオオカミと赤ずきん	5	並んで歩くオオカミと赤ずきん		
	6	花を摘む赤ずきんの後ろ姿	6	花を摘む赤ずきん	4	花を摘む赤ずきんと、4本足で歩き去るオオカミ
3. オオカミがおばあさんを食べ、変装	7	扉をたたくオオカミ	7	左右2枚の絵に分割扉をたたくオオカミとベッドの上のおばあさん		
			8	鏡に向かって変装するオオカミ	5	おばあさんの服に着替えるオオカミ (連続4カット)
4. 赤ずきんとオオカミの対決	8	おばあさんの家の前に到着した赤ずきん 窓におばあさんに化けたオオカミの顔				
	9	扉から入ってきた赤ずきんとベッドの上のおばあさんに化けたオオカミ	9	扉から中の様子をうかがう赤ずきん	6	扉から中の様子をうかがう後ろ姿の赤ずきん
	10	ベッドに横たわるオオカミとカーテンを開ける赤ずきん	10	赤ずきん(クローズアップ)と、ふとんに顔を隠そうとしているオオカミ		
			11	赤ずきん(顔の一部のみ)に襲いかかるオオカミ	7	赤ずきんに襲いかかるようにするオオカミ
5. 猟師による救出	11	おばあさんの家に向かう猟師	12	家の前を通りかかる猟師(上半身)	8	おばあさんの家のいびきに耳を傾ける猟師
			13	鉄砲をかまえた猟師(上半身)とベッドの上のオオカミ	9	はさみを手に持つ猟師とベッドの上のオオカミ
			14	死んだオオカミ、助けだされたおばあさんと赤ずきん、猟師	10	オオカミのおなかの中から助け出されるおばあさんの手を引っ張る猟師(上半身)とそのそばに立つ赤ずきん(上半身)
	12	石を拾う赤ずきん 小さく家の前に立つ猟師とおばあさんの後ろ姿				
	13	おなかに石を詰められたオオカミが倒れて死ぬ(連続4カット)				
6. 赤ずきんの決意	14	屋外で手をつないで立つおばあさんと赤ずきん テーブル上に3枚の皿	15	ベッドの前で考え事をする赤ずきん(上半身)と、ベッドの中のおばあさん	11	お菓子を運ぶ赤ずきん、屋外の椅子に腰かけているおばあさんと猟師
原作にない場面	15	(帰宅して)ベッドで寝る赤ずきん	16	オオカミの毛皮を背負って帰っていく猟師		

### 3. 4 物語の各部分の絵と文の分析

次に、展開を追って、3冊の文章と絵を比較した結果を述べる。物語を、(1) 赤ずきんの紹介とおつかいへの出発、(2) オオカミとの出会いと誘惑、(3) オオカミがおばあさんを食べ、変装、(4) 赤ずきんとオオカミの対決、(5) 猟師による救出、(6) 赤ずきんの決意に分け、それぞれの部分に該当する場面を特定した。そのうえで、各部分ごとに、3冊の文章と絵の相違点や特徴を分析した。

絵本の文章と対照した原作は、野村による完訳を用いた<sup>16</sup>。なおワッツの作品は、1968年にドイツ語版と英語版が同時に作られ、文章が多少異なる。前者がグリムの原文を使用しているのに対し、後者はワッツ自身が文をつけ、完訳ではなく部分的な変更がある。日本語版はドイツ語版からの翻訳である。以下、画家の姓の原綴の頭文字（ワッツはW、ガルドンはG、ツヴェルガーはZ）と表2の場面番号を用いて、個々の絵本の場面を示す（例 W1はワッツの絵本の第一場面）。

#### (1) 赤ずきんの紹介とおつかいへの出発

ワッツとガルドンは、赤ずきんの紹介と母親に別れを告げる赤ずきんの2場面（W1）（W2）（G1）（G2）から構成されるのに対し、ツヴェルガーは、赤ずきんの紹介にあたる場面はなく、エプロンの紐を母親に結んでもらって、おつかいに出発する場面から始まる（Z1）。

原作で「しとやかに歩いて」の部分が、ワッツは「おぎょうぎよく」（W2）、ガルドンは「かけだしたりしない」（G2）、ツヴェルガーは「おりこうさんにする」（Z1）と訳が分かれる<sup>17</sup>。

#### (2) オオカミとの出会いと誘惑

ワッツのオオカミは4本足で立っているのに対し（W3 図4）（W4）、ガルドン（G3）とツヴェルガー（Z2）（表紙 図3）は2本足で立ち、前足を腰にあてるポーズをとって、擬人化して描かれている。ガルドンの悪事をたくらむ表情（G4 図5）、ツヴェルガーのなよなよとしたポーズ（Z3）は、まるで人間のようである。ワッツとツヴェルガーが、最初にオオカミが登場する場面で（W3 図4）（Z2）、赤ずきんと間に一定の距離を置いているのに対し、ガルドンのオオカミは最初に登場する場面から、赤ずきんと間に距離がなく、親しげにふるまう様子を感じられる（G3）。ガルドンのオオカミは、第4場面でクローズアップとなり、赤ずきんよりも大きく描かれている（G4 図5）。

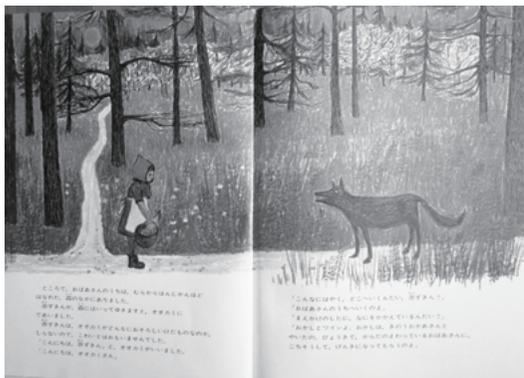


図4 第3場面（ワッツ）



図5 第4場面（ガルドン）

オオカミの問いかけは、原作では「エプロンの下に何を持っているんだい」であるが、ガルドンは「バスケットの中に何が入っているの」、ツヴェルガーは「何をさげているの」に言い換えている。高橋は、先行研究において、この部分の改変を行っている絵本が多いことを指摘している<sup>18</sup>。かごがエプロンの下に隠せないのは自明であるのに、このような問いかけをしていることに対し、グリム童話の研究を行ったマレは、「狼にとって重要なのは、(赤ずきんの)前掛けの下に実際にあるもの」として、赤ずきんがそれをはねつけたという解釈を述べている<sup>19</sup>。高橋は、マレの解釈を引用し、原作において、問いと答えのずれそのものに意味があり、改変はこの意を消していると述べている<sup>20</sup>。

オオカミは、原作で「このやわらかい娘っ子は脂がのっているな」と言うが、ワッツとガルドンでは脂の部分が省略され、「このやわらかいこども、こいつはうまそうなくいものだぞ」(W4)、「このかわいいちびすけは まるまるしていて なんてうまそうなんだ」(G4)と表現が変えられている。場面構成は、ツヴェルガーが1枚少なく、オオカミと赤ずきんが並んで歩くシーンがない。ワッツの表紙の絵は並んで歩く場面のものである(W5)。歩きながらオオカミは、「きれいな花」(原作)が咲いていると言って、道はずれるよう、赤ずきんを誘惑する。美しさを表現するに際して、ワッツは色とりどりの花畑の絵を描いた(W5)(W6)。ガルドンは、文章でも「いろとりどりのはな」と言い換えている(G6)。一方、ツヴェルガーは人物を中心に描き、花には彩色せず、読者の想像に任せている(Z4)。

### (3) オオカミがおばあさんを食べ、変装

原作では、オオカミは「寄り道などしないで」おばあさんの家に行ったという表現であるが、ワッツは「まっすぐに(中略)はしってゆき」(W7)、ガルドンは「いちもくさんに(中略)かけつける」(G7)、ツヴェルガーは「まっしぐらに(中略)かけつけて」(Z5)というように、走ったという表現が追加されている。昔話では、時間の経過が示されず、一瞬で別の場所に移動することもしばしばあり、オオカミがおばあさんの家に移動する時間の説明がなくても不思議ではない。しかし、絵本化する過程で、絵として目に見えない部分でも、現実世界に合わせた説明がなされている。

扉をたたく場面をワッツ(W7)、ガルドン(G7)が、変装の場面をガルドン(G8)、ツヴェルガーが描いている(Z5)。ガルドンは鏡を見る様子、ツヴェルガーはねまきに着替える様子をそれぞれ描いた。これらは主人公の赤ずきんなしに、オオカミ単独で構成される場面である。おばあさんが食べられる瞬間は3冊とも絵にしていない。

### (4) 赤ずきんとオオカミの対決

3冊とも、赤ずきんが、開け放しの扉から、中の様子をうかがう場面を絵にしている(W9)(G9)(Z6)。この場面のツヴェルガーの赤ずきんは、後ろ向きで表情は見えないが、つま先立ちでのぞき込むといった姿勢から、只ならぬ気配を感じさせる。原作(野村訳)での「こわいような気がする」という赤ずきんのセリフは、ワッツでは「むねがしめつけられる」(W9)、ガルドンとツヴェルガーでは「むねがどきどきする」(G9)(Z6)となっている。この場面の直前に、ワッツは、おばあさんの家に近づく赤ずきんの場面を挿入し、日が暮れていることによって、時間の経過を表している(W8)。



図6 第7場面 (ツヴェルガー)

原作の「まあ、おばあさんたら、なんて大きな耳をしているの。」から始まるクライマックスの部分には、3冊とも、「おみみ」「おめめ」「おくち」「おてて」という幼児語が使われている (W9) (W10) (G10) (Z7)。この表現から、絵本では赤ずきんの幼さが強調されている。ツヴェルガーは襲い掛かる直前 (Z7 図6) を、ガルドンは、赤ずきんにオオカミがまさに襲い掛かっているところ (G11) を絵にしている。しかしおばあさんの場合と同様に、いずれの作品も、赤ずきんが食べられる瞬間は絵にしていない。

### (5) 猟師による救出

この部分は、場面構成や個々の絵の構図が、絵本によって大きく異なる。3冊とも、猟師が家の前を通りかかる様子を一場面に構成しているが、背景などの絵の細部は異なる。ワッツでは、月が出ていて小鳥が眠っているところが描き込まれ、先の第8場面よりさらに時間が経過して夜になっていることが示されている (W11)。これに対して、ガルドンでは周囲は明るいままである (G12)。ツヴェルガーは、猟師が、森の中でなく、山の上でなく、山の上におばあさんの家から聞こえるオオカミのいびきに耳を傾ける様子を描いている (Z8)。藤本は、この場面について、助けに行く者を上部に大きく、助けられる者を下に小さく描いて、両者の関係を表現していると解釈している<sup>21</sup>。

猟師が通りかかる場面の後、ガルドンでは、鉄砲をかまえている猟師の姿を描いた場面 (G13)、オオカミのおなかから救出されたおばあさんと赤ずきんが立っている場面が続く (G14)。オオカミはその脇ですでに息絶えている。ツヴェルガーは、その少し前、オオカミのおなかからおばあさんが引き出される場所を描いている (Z10)。原作では、救出されたあかずきんは「ああ、もうびっくりしたわ。狼のおなかのなかってまっ暗なのね!」と言っているが、ガルドンとツヴェルガーでは、「こわかった」と言い換えられている。しかし両者の絵からはあまり恐怖感は伝わってこない。ガルドンの赤ずきんは口をあんぐりと開けており、恐怖というより驚きの表情である (G14 図7)。



図7 第14場面 (ガルドン)



図8 第12場面(ワッツ)

ワッツはこれら2つの場面は描かず、救出後に、赤ずきんが石を拾う場面を描いている(W12 図8)。赤ずきんが、救出後に、「いそいで」石を拾う場面を設けていることによって、赤ずきんの賢さが強く印象づけられる。この場面では周囲が明るく、夜が明け、さらに時間が経過したことも表現されている。ガルドンとツヴェルガーには、この石を拾う場面がなく、オオカミを退治するにあたって赤ずきんも尽力したことがあまり感じられない。特に、ガルドンでは、文章中で「急いで」の語も省略されており、赤ずきんの行動力の描写がいっそう弱まっている。

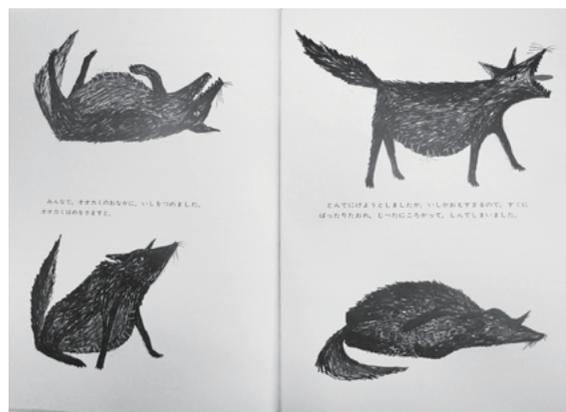


図9 第13場面(ワッツ)

さらにワッツは、おなかに石を詰められたオオカミが苦しむところを連続する4カットで描き、オオカミが人間の手で退治されたことを説明している(W13 図9)。これに対し、ガルドンとツヴェルガーでは、オオカミの死は文章で説明されるのみであり、読者の注意はオオカミよりも救出された赤ずきんらの方に向けられる。

## (6) 赤ずきんの決意

最後の部分では、元気になったおばあさんと赤ずきんの姿がいずれの作品でも描かれている(W14)(G15)(Z11)。ガルドンとツヴェルガーは、同じ場面の中に猟師も描いているが、ワッツの絵には猟師がいない。ただし、テーブルの上に皿が3枚あり、一緒に食事をしていたことが示される。赤ずきんが手を振っている相手も猟師であろう。

このとき、原作では、赤ずきんは、「ひとりで道はずれて森の中に入るようなことは、死ぬまでもう二度とするのはよそう」という決意を表明する。ガルドンでは、「道はずれて」の部分がなく、「もりのなかでふらふらする」という表現であり、赤ずきんが誘惑に負けて、指示を守れなかったというニュアンスに欠ける。決意の程度も、「もう二度としない」(W14)、「けっしてあんなことしないわ、あたし」(G15)、「けっしてしないわ」(Z11)というように、原作に比べて弱い印象である。

その後、ワッツでは、赤ずきんが帰宅して自分のベッドで寝ている場面（W15）、ガルドンでは、オオカミの毛皮を背負って帰る猟師の場面（G16）が続く。絵の大きさは小さく、文もつけられていないが、これらが2冊のラストシーンである。

原作では、赤ずきんの決意の後、屋根の上のオオカミを、赤ずきんらが、ソーセージをゆでたお湯の匂いでおびき寄せて退治するという話が短く紹介される。この部分はどの作品にも取り上げられていない。

#### 4. 3つの作品の特徴

オオカミがおばあさんや赤ずきんを食べるシーン、猟師がおなかを切り開くシーンは、いずれの作品でも絵になっていない。視覚化されることで、読者は、これらの肉体への攻撃を苦痛を伴う現実的な現象として意識せざるをえなくなり、昔話の持つ平面性が損なわれる。これらの瞬間を絵にすることを避けたことは、賢明な選択と言えるだろう。

3冊とも、原作にほぼ忠実に絵本化している。ただし、ストーリーの大筋には関わらないが、一部の本において、オオカミの問いかけの「エプロンの下」にあたる部分や、オオカミが「走って」おばあさんの家に行くなど、多少の改変がなされている箇所もあった。

次にそれぞれの絵本の特徴について述べる。

##### 4. 1 ワッツ

ワッツの絵本は、3冊の中で、原作に最も忠実で、絵の表現も、昔話の特性を生かしている。昔話一般の特性にならって、赤ずきんをはじめとする登場人物にはあまり表情がなく、内面がうかがえない。オオカミも擬人化されていないことで、個性のない存在になっている。他の2冊に比べ、赤ずきんは、一見、幼く見えるが、石を拾うシーンがあることで、賢さが印象づけられている。

全体が俯瞰して描かれ、登場人物を囲む情景が詳しく描き込まれており、森の深さや静けさを感じられる。空を広く描くことを通し、3冊の中で、唯一、物語の途中で、日が暮れ、また昇るといった時間の経過が表されている。

##### 4. 2 ガルドン

ガルドンの登場人物は表情豊かで、赤ずきんの表情も場面ごとにはっきりと描き分けられている。それだけに現実の少女のような印象を受け、神秘性は薄れる。ガルドンの赤ずきんについて、灰島が「知性が感じられない」と評しているのも、そのような現実味あふれる表現から来ているように思われる<sup>22</sup>。オオカミも、同様に表情豊かに擬人化されている。オオカミは、しばしばクローズアップで描かれ（G8）（G11）、もうひとりの主人公といった扱いである。オオカミ以外でもクローズアップを多用し、その結果として、登場人物の動作が強調され、動きを感じられる絵が多い。

##### 4. 3 ツヴェルガー

ワッツと同様に、はっきりとした表情はうかがえず、個性のない存在である。しかし昔話の主人公と違って内面的な深さがないわけではなく、手や足などの全身の細かい写実的な描写を通し、感情

の動きや緊張感が感じられる。オオカミは、場面によって、二本足で立つなど擬人化されているが、ガルドンほど表情豊かなわけではなく、動物らしさも残している。

#### 4. 4 まとめ

3冊の絵本の比較を通し、それぞれの絵本の特徴と共に、時間の経過や肉体への攻撃の扱いなど、昔話に特有の表現を工夫して絵本化していることがわかった。昔話は絵本化した時点で、昔話らしさの一部は失われるが、画家や再話者の工夫により、新たな作品としての魅力を作りだすことができると言えるだろう。

#### 図版出典

掲載図版は、絵本を写真撮影し、白黒印刷したものである。図版の出典は次の通りである。

- 図1、図4、図8、図9 バーナディット・ワッツ絵『赤ずきん』（引用文献12）  
図2、図5、図7 ポール・ガルドン作『あかずきんちゃん』（引用文献13）  
図3、図6 リスベート・ツヴェルガー画『グリムあかずきん』（引用文献14）

#### 注・引用文献

- 1 マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話：その形式と本質』小澤俊夫訳、岩崎美術社、1969、234、8p.
- 2 松岡享子『昔話絵本を考える』日本エディタースクール、1985、136p.
- 3 ハイנטツ・レレケ『グリム兄弟のメルヒェン』小澤俊夫訳、岩波書店、1990、p.123-135.
- 4 前掲 p.124.
- 5 アシル・ミリアン、ポール・ドラシュ「小さな女の子と狼」『フランスの昔話』新倉朗子訳、大修館書店、1988、p.73-76.
- 6 次の図録には世界で刊行された多くの赤ずきん絵本の原画が紹介されている。  
『トロースドルフ絵本美術館蔵赤ずきんと名作絵本の原画たち』板橋区立美術館、2005、281p.
- 7 「日本における「赤ずきん」出版物一覧」前掲6 p.254-261.
- 8 高橋久子「「赤ずきん」絵本の再話過程における“配慮”のゆくえ」『山口女子大学研究報告』No.11、1985、p.55-74.
- 9 谷本誠剛・灰島かり編『絵本をひらく』人文書院、2006、p.154-175.
- 10 灰島かり『絵本を深く読む』玉川大学出版部、2017、p.166-205.
- 11 藤本朝巳「五 グリム童話絵本（一）余白と描き込まれた細部：リスベート・ツヴェルガーの『あかずきん』」『子どもに伝えたい昔話と絵本』平凡社、2002、p.116-162.
- 12 バーナディット・ワッツ絵『赤ずきん』生野幸吉訳、岩波書店、1978、[ページ付けなし]、（大型絵本シリーズ）

- 13 ポール・ガルドン作『あかずきんちゃん』ゆあさふみえ訳, ほるぷ出版, 1976, [ページ付けなし].
- 14 リスベート・ツヴェルガー画『グリムあかずきん』池田香代子訳, 富山房, 1983, 23p.
- 15 所蔵調査の対象は、東京都と、島嶼部を除く全区市町村（webOPACのない檜原村を除く。23区および29市町）の図書館である。自治体で1部でも所蔵していれば所蔵とした。ISBNを用いて調査し、未所蔵館については、個々の館のwebOPACで書名や著者名等を用いて再検索した。2019年10月27日に、東京都立図書館のサイトの横断検索と未所蔵館の再検索を行った。同サイトに統合されていなかった江東区、国分寺市、羽村市は個別に検索した（2019年11月4日検索）。
- 16 「赤ずきん」『完訳グリム童話集2』野村法訳, 筑摩書房, 1999, p.49-58.
- 17 金田鬼一の訳は「おてんばをしないで」である。  
『グリム童話集：改訳』金田鬼一訳, 岩波書店, 1954, p.265. (岩波文庫)
- 18 前掲8 p.58.
- 19 カール＝ハインツ・マレ『「子供」の発見：グリム・メルヘンの世界』小川真一訳, みすず書房, 1984, p.124.
- 20 前掲8 p.58.
- 21 前掲11 p.147.
- 22 前掲10 p.187.